

南インドにおけるアーリヤン化と佛教受容の態勢

——ダクシナーパタを中心として——

佐々木教悟

一 ダクシナーパタの地理的概念

インド古代史の上でわれわれが通常、南インドと呼ぶ場合は山脈でいえば、ヴィンディヤ(Vindhya)、河川でいえばナルマダー(Narmada)を境界線として、それより南の地域全體を概括的に指すのが常識である。ところでこの南の地域の中、ナルマダー河以南ツンガバドラ(Tungabhadra)河以北の高原地帯に對しては、とくにデッカ(Deccan, Dekkan)なる呼び名があたえられているが、そこはまた古い文獻では Dakṣiṇa-patha (Dakṣiṇāpata 南路、南方、南國)^①ともいわれている。このダクシナーパタが北インドを指す Uttarā-patha (北路、地方、北國)^②に對應する語であることはいうまでも

なからう。前者はアンドラ王朝の英主 Gautamiputra Satakarṇi に關する Nasik 碑文^③に、後者は轉輪聖王と呼ばれたカリンガの Kharavela の Hathigumpha 碑文^④にその語があらわれている。この中、ウッタラーパタについてはラモート教授がすでに詳細にその考證をあたえているから、目下はダクシナーパターについて若干の考察をしてみたいと思う。

紀元一世紀の中葉に編纂せられたといわれている一エジプト人の航海・貿易記録なる『エリュトウラー海案内記』(Periplus Maris Erythrei) には、

バリュガサの後には直ぐこれに續く海岸が北から南へと延びて居り、その故にその地帯はダキナパデースと

も呼ばれる。と言うのは彼等の言葉で南はダカノスと
呼ばれるから。(第五十節)
云云と記述している。

ここにいう dakanos とは dakkhinā を指し、dakhi-
napades とは mahāśūka は dakkhināpāda を、したがって
patha を指したものであることはいうまでもない。と
ころでこの文面のみでは、北から南へ延びている海岸地
帯、すなわちアラビア海にのぞむ沿岸地域を指すかのよ
うにうけとれるが、それに續く文章およびつぎの第五十
一節の文章によれば、かの海岸地方の上手にあたり、東
に向いた内陸一帯をダキナパデースと稱していることが
明かに知られる。

しからばそのダキナパデースにおける主要な都市と交
通路および物資集散の模様は、およそいかなるものであ
つたかというに、『エリュトウラー海案内記』はつぎの
ごとく記している。

此のダキナパデースにある商業地のうち最も著名なも
のが二つあり、バリユガザから廿日の道のりだけ南に
距つたパイタナと、これから約十日の距離東にある別
の非常に大きな市のタガラとである。これらの市から
車によつて道のないところを大變な距離に互つてバリ

ユガザまで運び下されるものとしては、パイタナから
は非常に多量の縞瑪瑙、タガラからは澤山のありふれ
た綿布と種々の上質綿布とモロキナと其他沿岸方面か
ら其處に地方的に運ばれる品々とである。(第五十一節)

ここに基地としてあげられるバリユガザ (Barygaza)
はナルマダー河口にある現今のブローチ (Broach) にあ
たり、パイタナ (Patihana) はゴードーヴァリー河上流
のパイタン (Patihan) にあたり、タガラ (Tagara) は
Hyderabad 州の Ter に比定されるが、これによればダ
クシナーパタを横断していた主要交通路は、ほぼゴード
ーヴァリー河の流れに沿うて上流から下流へと向い、ゴ
ードーヴァリー河とクリシュナー河とのあいだのハイダラ
バード地區を横切つて兩河のデルタ地帯にいで、ベンガ
ル灣にのぞむマスリパタム (Masulipatam) 附近に通じ
ていたことが知られる。學者はカウティルヤの『アルタ
シャーストラ』(Arthasāstra 實利論)にもとづいて、マ
ウリヤ時代當時、このダクシナーパタにおける交通路の
便利であつたこと、土地の産物の豊富であつたこと、し
たがつて商人の往來が頻繁であつたことを述べ、南と北
とを比較して、南部との取引が重要視せられたことを論
じている。^⑧

註

- ① 萩原雲來編纂、梵和大辭典五六四頁参照
- ② 前同書、二四四頁参照
- ③ Epigraphia Indica Vol. VIII, p. 610
- ④ Epigraphia Indica Vol. X, p. 71-89
- ⑤ E. Lamotte: Histoire du Bouddhisme Indien p. 109-
- ⑥ 村川堅太郎譯、一一四—一一五頁
- ⑦ 前同書一一五頁
- ⑧ Nilakanta Sastri: A History of South India, p. 81; Louis Renou: La civilisation de l'Ind ancienne, p. 201

二 ダクシナーパタのアーリヤン化

ダクシナーパタに對する aryанизation は相當早くから始まつている模様である。すなわち紀元前千年ころからはじまり、カーティヤヤーナ (Katyāyana 南インド出身の文典家) のでた前四世紀のころには、そのアーリヤン化はほぼ達成せられるくらいまで進行したといわれる。このアーリヤン化の進行は、もちろんアーリヤン人の植民によるものであろうが、アーリヤン人がかれら自身の文明を土地の住民たちにつたえるのに充分な數と力を有していたとしても、おそらくそこにはいろいろ複雑な問題が発生したに相違ない。

南インドにアーリヤンの慣習を最初にもたらしたとき

れる聖仙アガステイヤ (Agastya) の物語は、われわれに諸種の暗示をあたえる。聖仙ヴィシュヴァーミトラ (Viśvanitra) がアーリヤヴァルタ (Āryāvarta アーリヤ人の國土) の邊に住むスナシエーパ・デーヴァラータ (Sunāśepa Devarāta) を羨望した五〇名の息子たちを罰したこと、そしてかれらの子孫たちがアンハラ (Anhara)、『パウンドラ (Paundra)、『シャムハラ (Sahara)、『プリンダ (Pulinda)、『ムーティヤ (Mūṭiḥa) のつとぎダヌ (Dasyu 奴隸) であつたとするのは、ブラーフマナ時代における南インドの情況を反映したものとかんがえられる。一般に學者はダクシナーパダ (Dakṣiṇāpada 南國) に關する最初の歴史的言及は Aitareya Brāhmaṇa においてであるといつてゐる。^⑧

ヴィンディアの南に對してアーリヤン化が行われつつあつたその初期にヴィダルバ (Vidarbha、現今の Berar) なるアーリヤン人の國家が出現したといわれる。これは安定した國家としては最初のものであつたといわれるが、そのヴィダルバを中心として、アーリヤン化せられた小國が周邊にいくつかできた模様である。もちろんそのかんには、アーリヤン人と非アーリヤン人とのあいだに混血がなされ、そして當然のこととしてカーストの向

上や墮落が行われたとかがえられる。古代においてカーストの向上の機會があつたことはすでに知られているが、^④前述のヴィシシュヴァーミトラ仙の物語にあらわれるアンドラが、そこではダスヌの地位におかれているが、後世のバラモン階級の部族のリストには、南部のバラモンとしてアンドラが加わっているのである。

ちなみに大乘佛教の論師として名高いナーガルジュナ(Nāgārjuna 龍樹、二―三世紀)は、バラモンの出身で、その生國は前述のヴィダルバであつたとつたえられてゐる。^⑤

註

- ① cf. The Cambridge History of India, Vol. I, p. 596
 Note 1
 ② cf. op. cit. Vol. I, p. 117
 ③ R. C. Majumdar etc.: An Advanced History of India, p. 55
 ④ 辻直四郎編「印度」五六、五七頁
 ⑤ Candra Das: Dpag-bsam ljon-bzhan p. 85 etc.

三 佛陀の教化と佛弟子の活動

釋尊直接の行化地域は、學者の研究によればコーサラ國の首都サーヴァッティー(Sāvasthī 舍衛城)とマカダ

國の首都ラージャガハ(Rājagaha 王舍城)を二つの中心として、サーケータ(Saketa)ノーサンブー(Kosambh)バーラーナシー(Bārānasi)ヴェーサーリー(Veśālī)パーヴァー(pāvā)カピラヴァットウ(Kapilavasthu)等をふくむほぼ楕圓形の地域であつた。釋尊自身は後世の佛傳にしろされるようなガンダーラ(Gandhara)や、ダクシナーパタをはるかに越えたランカーデーパ(Lankāḍḍīpa セイロン島)へは赴かれなかつたことが明かにされている。^①しかしながら釋尊の弟子たちの出身地を調べてみると、かれらは北インドからも南インドからも來ていたから、釋尊が直接その地を踏まれなくてもその間接的な影響は佛弟子の出身地なる諸地方にも及んだことが察せられる。しかれば釋尊時代における南インド出身の佛教歸依者はどれだけあつたかというに、比丘二七名、比丘尼五名、優婆塞五名、優婆夷三名の計四〇名であつた。^②もつともここにいう南インドとは、後に述べることくダクシナーパタと特別に關係のあつたと見られるアヴァンティ(Avanti)をふくめたものである。ところでこの數は諸種の經典にその名のあらわれているものの數であるから、この他にもその名のあらわれない人がおそらく何名かあつたこととおもわれる。

さて南インドに關係のある比丘の中で最も著名な人は、十大弟子の一人に數えられているマハーカッチャーナ (Mahākaccana 摩訶迦旃延) であつた。かれはアヴァンティの都ウッジャーニー (Ujjain 現今の Ujan) の人で、クシャトリア (Kṣatriya 刹帝利階級) の出身であつた。かれは釋尊の成道第十二、三年のころ、バーラナシにおいて、初めて釋尊にまみえ、その教を聞いて僧伽の一員となり、たちまち頭角をあらわした。かれはひじような才能と實行力を有し、廣説第一、分別第一の長老と喧傳されるようになったが、アヴァンティの西南に位置する海岸地方のアペラント (Aparanta) で活動したブンナ (Punna 富樓那) とともに教團の實力者であつた。かれはアヴァンティの國王を佛教に歸依せしめたのみならず、南方のアッサカ (Assaka) 中部のヴァンサ (Vansa) および北方のスーラセーナ (Surasena) などの諸國に赴いて教化活動に従事したといわれている。

しかるにかれ自身のこのような邊國の教化活動について、あまりその効果を認めない慎重な説^④も行われているが、インドのような土地柄にあつては、近年における集團佛教歸依の例^⑤によつても知られるごとく、一人の偉大な佛教者の感化は想像以上のものがあると見るべきであ

ろう。もちろんマハーカッチャーナの邊國教化活動は諸種の傳説によつていろどられており、その活動を示す資料の中には不確實なものもふくまれているとおもわれるが、かれの活動によつて南インドのアッサカにまで教線がのびたこと、そしてそのことが原始佛教教團發展史上特筆に値する事柄であつたことは認めてよいとかんがえられる。^⑥

註

- ① 増永靈鳳「佛陀に於ける巡行教化の地域」〔『根本佛教の研究』三五八頁〕
- ② 赤沼智善「釋尊の四衆に就いて」〔『原始佛教之研究』三八三頁以下〕
- ③ 水野弘元「釋尊の生涯」二五三頁
- ④ 山田龍城「原始佛教教團の擴がりとその時代的區分」〔『印度學佛教學研究』一ノ二、二四八頁〕
- ⑤ Dr. B. R. Ambedkar (1891—1956) の佛教歸依が縁となり、その感化をうけて、Nagpur にて一九五六年に約十五萬人のインド人が、同時に佛教徒になつたことを指す。
- ⑥ 前田惠學「原始佛教教團發展史上における大釋迦旃延の位置」〔『印度學佛教學研究』三ノ二〕参照。

四 アッサカへの佛教弘通

阿舍の經典によれば、釋尊の時代にすでに一六の大國

(Mahajanapada) がインドに興起していたことが知られるが、そのうちまぎしくダクシナーパタに屬するもの前に述べのアッサカ (Assaka, Asmaka 阿設迦、阿濕摩迦) なる國があつた。このアッサカの首都は Potan もしくは Potah として、そこは現在のアンドラ州 Nizambad の西、Bodhan に比定されている。そのアッサカの北にアラカ (Alaka) があり、さらに西北にはムラカ (Mula-ka) があつた。そしてアッサカとアラカの兩國の中間にゴダーヴァリー河が流れていた。そのゴダーヴァリー河をさらに上流へ遡ると、ムラカの首都パティッターナ (Patithana, Pratihana) に達した。以上は『スタタニペータ』(Sutanipata 經集) のしるすところである。ところで學者の研究によれば、この『スタタニペータ』は佛教の多數の聖典の中でも最古の層に屬するものといわれるが、その『スタタニペータ』の中でも、第四章の「アッタカ・ヴァツガ」(Aihaka-vagga 八つの詩句の章)と第五章の「パーラーヤナ・ヴァツガ」(Parayana-vagga 彼岸に至る道の章)とは最も早く成立したもので、そこに収めてある詩あるいは短い句は、すでにアシューカ王 (C. 268-232 BC.) 以前に成立したものとかがえられている。目下依用しつつある資料はこの

「パーラーヤナ・ヴァツガ」である。

さてここにあげるムラカの首都パティッターナが前述の『エリュトウラー海案内記』のペイタナに相當するとは疑問の餘地がない。したがつてアッサカを初めとするこれらの諸國は、いずれもダクシナーパタの交通動脈上に浮びるのである。もつとも、ここにいうムラカがかの Mulikanadu を指したものとすれば、同じ南インドであつても、そこはチュッダパー (Cuddapah)、『クルヌール (Kurnool)』、『ベツラリ (Bellary)』を包含するところの現今のアンドラ州からマイソール州にまたがるクリシュナー河以南の地域を指すことになり、「パーラーヤナ・ヴァツガ」の記述と相異することになる。おそらくクリシュナー河以南のその地域に對しても、ムラカなる同じ呼び名があたえられたことがあつたのであろう。しかしながら、いまいうムラカはゴダーヴァリー河流域におけるものを指すとするのが妥當である。

さて、かのマハーカッチャーナ長老は、このムラカの隣りのアッサカに赴き、その地の住民に佛陀の法を傳えたのであつた。アッサカの北には、前に述べたヴィダルバが位置しており、他の處に比して文化的にも開けていたことが知られる。この國の國名と國王とは、同じくア

ッサカなる呼び名でしばしば經典にもあらわれている。^④
『ヴィマーナヴァットトウ』(Vināvatthu 天宮事)の註釋には、この國の王子スジャータ (Sujāta) が、若き妻の愛に溺れた父王のために逐われて出家し、マハーカッチャーナ長老に法を聞く話がしるされている。

またアッサカはアヴァンティの屬領となつたことがあり、アッサカとアヴァンティとは、とくにふかい關係があつたとかんがえられる。この Assaka-avanti の他に、後にもあげるところ、律典に Avanti-dakṣiṇāpathaka (阿槃提南路の比丘) などとあるのは、アヴァンティおよびダッキナーパタの比丘ともとれるが、また一方では、アヴァンティに屬するダッキナーパタの比丘とも解せられる。しかしいまはそこにいわれるダッキナーパタにアッサカがふくまれていたかどうかの問題とするのであるが、アッサカとアヴァンティとの關係から見て、當然アッサカがふくまれていたのであり、アヴァンティに據點をもつた佛教は相前後してアッサカにも根をおろすにいたつたとかんがえられる。

註

- ① E. Lamotte: Histoire du Bouddhisme Indien, p. 9
② 中村元『ブッダのことは——スッタニパータ——』二六

四頁

③ C. Sivaramurti: Bulletin of Madras Government Museum, 1956, p. 6

④ 水野弘元『南傳大藏經總索引』によれば、國名——⑦二四九、⑩三四五、⑪一四六、⑫三七一、⑬三六〇、王名——⑭五二二、⑮二六〇、⑯七七等にてゐる。また、舞臺をカーシー國に移して Assaka-jātaka (J. 207) をうみだしてゐる。

⑤ Paramathadipani (P. T. S.) p. 259-

⑥ B. C. Law: Geography of early Buddhism, p. 21

⑦ Vinayapiṭaka, Vol. II p. 298; cf. M. Hofinger: Étude sur le concile de Vaiśālī p. 55

五 一六バラモンの佛教歸依

さて「バーラーヤナ・ヴァツガ」にはつぎのごとき記述がある。コーサラ國出身のバーヴァリー (Bāvārī) というバラモンが無所有の境地を得ようとしてダッキナーパタへ來り、アッサカとアラカの中間を流れるゴードーヴァラー河の岸邊に住みついて修行をしていた。しかるところ惡意のある一バラモンのために呪詛を受け、懊惱の日を送つた。ときあたかも釋尊が故郷のコーサラ地方ですべれた法を説きつつある噂を聞いた。かれは釋尊の教を學ばしめるために、アジタ (Ajita) をはじめとする

一六名の自分の弟子を遣わした。弟子たちは北方に向つて出發した。

かれらは先ずムラカのパティッターナに行き、それからアヴァンティのマーヒッサアイ (Mahissati) へ、つぎにウッジエニー (Ujjeni) へ、つぎにナーナッダ (Gonaddha) へ、つぎにヴェーディサ (Vedisa) へ、つぎにヴァナサ (Vanassa) へ、つぎにコーサンビー (Kosambi) へ、つぎにサーケータ (Saketā) へ、つぎにサーヴァットイー (Savatthi) へ、つぎにセータヴィヤー (Setavyā) へ、つぎにカピラヴァットゥ (Kapilavastu) へ、つぎにクシナラー (Kushinara) へ、つぎにパーヴァー (Pāvā) へ、つぎにボーガー (Bhoga) へ、つぎにヴェーサーリ (Vesālī) へ、つぎに道をとおり、ついにマカダの首都ラージャガハにて釋尊に謁し教を聞くことができた。かれらはそれぞれ問題とするところを釋尊に質問し、満足な答を貰つて大いによろこび、世尊の許にて出家することをこいねがい、ともにゆるされて佛弟子となつた。かくして暫く滞在したのち、かれらは南の國に歸り、かつての師パーヴァリーに事の次第を報告した。

「パーラーヤナ・ヴァツガ」の一〇一八から一一四九には、かれらと釋尊とのあいだの問答ならびにその問答の意義が説かれてある。それはまさしく彼岸にいたる道を明かにしたものである。ところでこの一六バラモンの佛敎歸依^①は、釋尊の生涯中いつのころのことか明白では

ないが、おそらくそれは晩年に近いころの事件でなかつたかとおもわれる。このようにして、釋尊自らは實際に南インドの地を踏まれなかつたのであるが、その教法は釋尊の在世中にすでにアッサカ附近にまで傳えられたとみられるのであり、しかもバラモンという、いわば知識階級に屬するものが一六名も同時に集團歸依^②したことは、そののちの南インドにおける佛敎弘通のための地盤を築いたものとしてかのマハーカッチャーナ長老の活動とともに注目せらるべき事柄であろう。とくにかれらと釋尊とのあいだにかわされた問答内容をうかがうに煩惱、執著、供養、解脱、如實智といつた宗教的にも高度な問題がそのテーマとなつているから、もしもかれらが佛敎に歸依してのち實際に活潑な布敎活動を行つたのであれば、上部構造にも相當な感化影響をあたえたにちがいないのである。しかしその點についてわれわれは何も知ることはできない。

註

① 一六バラモンの佛敎歸依はマハーカッチャーナの教化事業の間接的影響かも知れないという見解もある(前田惠學

氏前掲論文註^②)。

② 中村元『ゴータマ・ブツダ』一七二頁参照

六 ダクシナーパタの比丘

釋尊の入滅後およそ百年餘り経過したときにヴェーサーリーで開かれたという七百結集の歴史性に關しては最近精緻な研究が公にされて、諸律のあいだに記述の相異がありながらも、その史實性に對しては疑いをさしはさむ餘地がなくなつた。すなわち上座部系諸律のしるすところによれば、ヴァッジプッタ (Vajjiputta) の比丘たちと對立したヤサ (Yasa) がインドの各地を廻つて有志を集めて、ヴェーサーリーで七百人からなる比丘の會議を開き、十事を否決した。そのときにヤサを支援したものに、六〇名の Patheyyakā、八八名の Avantakkinhīnāpāthakā のあつたことが明かにされている。この中で、Patheyayaka とは Patheyya (波利邑) の比丘たちのこと、それは東方の比丘 (Paṭimāka 波夷那) に對して西方の比丘を指すといわれる。しかし西方といつても具體的に何處を指すかというに、學者の中には Patheyayaka = Pāveyyaka と見て、それは Pava の比丘であろうとした人もあるが、普通コーサラ國の西南地方にいた比丘であろうとかがえられている。また Avanti-dakkhināpāthaka については、前にも一言したが、およその方向

けをすれば、さらに西南から南にかけての地方に住した比丘を指すことになる。そして前者に六〇名、後者に八〇名をこえる有力な比丘が存在していたということは、釋尊の晩年ごろからその教線が次第に西南方にのびて滅後百年ごろにはこの方面に佛教の中心がうつりつたことを物語るものといふことができる。

すでに知られているごとく、佛教の教團は前三世紀のアショーカ王の治世に行われた數組の傳道者の派遣によつて、地域的にも一大飛躍をとげたが、そのときセイロン島へ渡つたマヒンダ長老一行がインドを離れる前に掛錫していたところは、かの大塔で有名なサンチー (Sanchi) であつた。④そこはまさしくかの一六バラモンがアッサカから釋尊を求めて旅をした通路にあり、ゴーンナツダとヴェーディサのあいだに位置していた。ヴェーディサは當時アヴァンティの東の都であり、政治・文化の中心地であつた。ヴェーディサの古城址からはいまもなおサンチーを指呼の間にのぞむことができる。われわれはここにかのマハーカッチャーナがアヴァンティの出身であつたことを想起する。またかれの弟子ソーナ・コーティカンナ (Sona-kotikanna 億耳) 比丘がアヴァンティ・ダクシナーパタのごとき邊國の教團のために、とくに世尊

に五事 (Panca prastani) の許可を願つたことの意味についておもわしめられる。五事とは比丘の数の少いところでも受具ができ、風土の異るところでも出家生活が遂行できるための便法である。そこに未開教の地に釋尊の正法を傳えようとしたかれらの行動性をうかがうことができるようである。

いづれにしてもダクシナーパタ、すなわち南インドに佛教が傳えられたのは、釋尊在世中のことと見るのが妥當であり、釋尊滅後間もない時期には、すでに相當數よりなる比丘僧伽を有していたものとかんがえられる。

註

- ① 平川彰「七百會議の歴史性」(『律藏の研究』六七三頁—)
- ② 前同書六八九頁
- ③ 赤沼智善『印度佛教固有名詞辭典』四九九頁
- ④ John Marshall: A Guide to Sanchi 3rd ed. 1955, p. 8
- ⑤ 『摩訶僧祇律』卷二三(大正二二、四一六七)
- ⑥ 靜谷正雄「金石文より見たアーンドラ時代の南インド佛教」(『佛教學研究』第八、九號八九頁) 參照

大谷大學研究年報 第十三集目次

願念寺藏 教行信證化身士卷

延書本の検討と或る臆説 日野環

佛教興起のインド

——宗教と社會的基盤の研究序説—— 雲井昭善

「無底」について 阿部行人

身體について 岩見至

洪武朝の都察院について 間野潜龍